

留学・研究計画書

氏 名 平山 光将	留学機関名 中国社会科学院民族学人類学研究所研究生院
留学先国名 中華人民共和国	留学期間 西暦 2007 年 10 月 ~ 2008 年 9 月
研究テーマ 抗日戦争期中国西北地域における中国共産党の民族政策と回民社会	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>回族は中国におけるイスラム教徒の民族であり、少数民族の中では、壮族について2番目に多い人口を持つ。したがって回族に関する研究は、多民族国家中国の現状を考える上で重要な意味を持つものと考えられる。しかし、多民族国家中国の形成過程における回族の状況に関する研究は十分とは言えない。そこで本研究は、新中国建国以前の回族の政治的・社会的状況、特に中国共産党が抗日戦争期の根拠地である陝甘寧辺区において進めた回族政策の具体的な内容、および中国共産党と回族社会とのかかわりについて明らかにすることを目的とする。</p> <p>私はこれまでの研究で中国共産党の回族政策について、特に延安回民救国協会との関連性を中心に調査を進めてきた。延安回民救国協会というのは、元来回民抗日団体であり、国民党によって設立された中国回教救国協会の支部として、第二次国共合作の中、陝甘寧辺区において成立したものである。中国共産党は、回民と呼ばれていた集団を民族としての回族と定義し、統治の対象を明確化した上で、回族に対する統治を進めるために、上記の延安回民救国協会を回族の抗日団体として組織改造し、下層回族への権力浸透を行ったことを明らかにした。だが、現時点において、以下の3つの問題点が解決していない。</p> <p>(1) 陝甘寧辺区政府がいかにして回族社会に入り、回族エリートや下層回族の支持を勝ち取っていったのかという問題である。現時点において、下層回族に対する政治権力の浸透に関して延安回民救国協会がいかなる具体的な活動をしたのかについて不明確である。(2) 既存の回教宗教集団である門宦と新興勢力である中国共産党政権との関係が分かっておらず、回族政策の本質と実態が明確化されていない。(3) 陝甘寧辺区政権内の中枢にいた李維漢や王明はスターリンの民族論を基礎として回族論を打ち出し、辺区選挙制度における公民権付与の範囲を明確化した。だが下層の回民民衆の民族意識はどうであったのか。回民民衆が自らを回族として認識し始めた要因は何か、また時期はいつであるのか。</p> <p>現時点の研究課題を解決するために留学中、陝西省档案馆や北京の中国第二歴史档案馆といった档案馆に出向き文献調査を行う。また、中国社会科学院民族学人類学研究所の方素梅先生から最新の民族調査方法を取り入れつつ、回族が集住する陝西省や甘肅省など中国西北地域で現地調査を行い、回族からの聞き取り調査を進めたい。</p> <p>特に研究留学中の現地調査では、抗日戦争期を体験した現地の回族老人からの聞き取りをすすめたいと考えている。抗日戦争を体験した現地の回族老人はかなりの老齢を迎えており、生の声を聞くには今しかないと考える。回族老人の証言と現地の档案馆で発掘した史料を照合していき、権力者が語る歴史とは異なる「下層からみた歴史」を描くことにより、抗日戦争期の回族の実情を明らかにしていくことを目指したい。</p>	

成果報告書

記入日 2008 年 10 月 24 日

氏名 平山 光将	留学先国名 中国	所属機関 中国社会科学院民族学人類学研究所 研究生院
研究テーマ :		
留学期間 : 2007 年 10 月 ~2008 年 8 月		
<p>まず、今回の留学の成功に関して、松下国際財団の方々による経済面、精神面に対するご支援に感謝の意を表します。2007年10月6日に中国社会科学院民族学人類学研究所研究生院に留学を開始してから2008年8月28日に帰国するまでの中国滞在中に関する出来事、感想を述べたいと思います。</p> <p>前述した通り、2007年10月6日に中国での留學生活を開始したのですが、今振り返ってみると始めの一カ月はいろいろと不慣れな事の連続でした。まず宿舎ですが、北京の10月の気温は東京の12月上旬の気温になるのですが、入浴する際、たまに宿舎のボイラーが壊れて、お湯が出ず冷水で入浴したこと(旧正月の休暇期間中もこのようなことがありました。)その上、北京は10月、11月の2ヶ月間は1年の内で最も空気が乾燥するため、11月中頃まで風邪をよく引いていたことが思い出されます。ただ、指導教授である方素梅先生や現地の親友の協力もありまして、研究の方はなんとか順調に滑り出しました。まず中国で始めた事は、私自身がこれまで研究してきた回族とは何かを勉強し直すことから始めました。とりあえず北京中の書店にある回族関係の書物をすみから読み直し、その上、中国国家図書館等の史料館に行き、とにかく史料を集めることに専念しました。その結果、私自身が回族の社会習慣や思想的な側面に関してまったくの無知であることを思い知らされ愕然としました。ただ、幸いなことに、方素梅先生の勧めで台湾の国立政治大学の張中復先生が中央民族大学でゼミを開かれているとのことで是非参加するように勧められ、参加しました。その先生のゼミでは回族の院生と共に議論する機会が与えられ、欧米圏の回族に関する研究書を議論のたたき台にするものでした。以前、これらの本を読んでいたつもりでいたのですが、やはり見落としがあったことは否めず、勉強になりました。このゼミで今でも親しくしている友人ができました。さらに幸運だったのは、私が留學中生活していた招待所の女性従業員が寧夏回族自治区出身の回族で、彼女とは、2007年11月頃から交際が始まり現在に至っております。彼女は私にとって中国語と研究の先生でありました。日本で中国語はちゃんとマスターしたつもりでいたのですが、いろいろと中国語の言い回しの誤りを指摘してもらったり、回族の風俗習慣について懇切丁寧に教えてくれました。何よりも、彼女は私にとって精神的な支えであり、いつもそばで話し相手になってくれて、中国語力が向上したのと留學中に研究成果の発表ができたのも彼女のおかげだと言っても、過言ではありません。</p>		

年が明けて2008年ですが、まず1月25日に天津に2006年に北京に旅行した際、友人の紹介で知り合った現地の友人の所に遊びに行きました。これを契機に留学終了まで調査を兼ねた旅行に出ることになります。旧正月が明けた2月14日から21日まで交際している彼女の地元である寧夏回族自治区銀川市永寧県に北京から夜行列車で20時間かけて行ってきました。そこは前述した張中復先生のゼミで知り合った友人の故郷で、その方が帰省中とのことで実家にお世話になりました。ここで得た経験とは回族の普通の家庭生活を見ることができたことと世界中の回族研究者が必ず訪れる納家戸清真寺を訪問したことです。完全に氷に閉ざされた黄河の上をその友人と歩いて渡ったのは南国育ちの私にとって人生初体験であり、得難い体験もしました。また、3月4日から8日まで河南省開封に行ってきました。そこでは以前、私の大学に1年間留学されていた河南大学の趙国権先生に留学中3度にわたる開封滞在中に大変お世話になりました。趙国権先生が私のために先生の私と同年代の学生との交流会を開いていただきました。その交流会の中で、たまたま開封の回族の方がいまして、後日開封最大の清真寺である東大寺に案内してくれました。さらにそこでも、その回族の人の兄が元高校教師で同僚にやはり開封の回族について研究している中央民族大学の院生の方がいるとのことで、北京に戻った後、その方と連絡を取り、実際に会って、いろいろと開封の回族について話した所、意気投合して、現在でも研究の重要なパートナーとなっております。彼からもいろいろと良い刺激を受けました。少し話は前後しますが、イスラム教の戒律で困っている人がいたら、手を差し伸べなさいというのがあるのですが、私に対しても君は研究調査をやって成果ばかり上げるのは良くない。君が開封の回族に対して何か貢献できることはないか考えてみなさいと言われました。実際、彼は今夏に内モンゴルの回族地域を研究調査した際、イスラム教の衰退ぶりに愕然として、現地の回族がイスラム教の礼拝をしやすくするために、北京の中国イスラム経学院で学んでいる学生に対してアホンを派遣させるために奔走しておりました。私は彼の有言実行に感動し、これまでの研究姿勢を考え直す契機を彼は与えてくれました。実際、開封を研究している人(現地の人でもいいのですが)は、私の知る限り、開封の回族には注目していない。私は彼のようにアホンを呼ぶようなことはできませんが、少なくとも今後論文を書くにあたって開封回族の存在を学术界や日本社会にアピールすることで開封の回族に貢献できるのではないのでしょうか。彼に言われた言葉は今では私の研究方針にもなっております。横道にそれましたが、4月も開封に調査に出かけ、歴史的に価値のある開封回族に関する石碑記録の収集、史料の収集をすることができました。5月、6月は四川大地震の影響で、調査には出かけず、北京の国家図書館で史料の収集や論文を作成、完成させました。留学も終わりに差しかかってきて、留学期間中の最後の開封訪問を、前述した現在交際中の彼女と行ってきました。河南大学の原思明先生の紹介で開封市民族事務委員会の郭宝光氏と出会いました。郭氏と交際中の彼女の勧めで宿泊していたホテルのそばにある文殊寺清真寺で以前現地の友人の紹介で知り合ったアホンの許可を得て、礼拝に参加しました。もちろん郭氏、交際中の彼女および文殊寺のアホンの指導の下で礼拝に至るまでの準備や文殊寺で学んでいるハリファー(学生)との交流でイスラム教の教義についていろいろと詳しく教えていただきました。おかげで、これまで学んだことのなかったイスラム教の精神について関心を持つことができ、現在でも勉強中です。書きたいことは山のようにあるのですが、紙面の都合上、ここまでとします。御拝読していただきありがとうございます。